



朝日子だより

吉田高校 進路指導部

H22. 10. 21 発行

学生編 Vol. 8

吉高生のみなさんへ

大学での生活や、研究に関して書かせていただきました。皆さんの手助けになれば幸いです。

原 功一（平成18年度 理数科卒業）

早稲田大学 創造理工学部 建築学科 4年生



現在学んでいる内容・・・

私

は現在、早稲田大学建築学科の建築史研究室に所属しております。建築学科と聞くと、設計図を描いて、模型を作って、というイメージを持つと思います。恥ずかしながら自分自身も、高校時代はそれくらいのイメージしか持っていませんでした。しかし実際には、建築学科の範疇は多岐に渡っており、設計のみならず、建設に関わる全ての分野に関する研究・教育を行っています。非常にざっくり区分すると、建築計画・都市計画・構造・環境・材料・生産などがあり、私はその中のひとつ、「建築史」を学んでいることになります。具体的には、世紀末ウィーンの建築家、アドルフ・ロース（Adolf Loos, 1870-1933）という人物を対象に研究しています。彼は近代建築の先駆けとなる存在であり、「装飾は犯罪」である、という発言で知られています。所属するゼミでは、当時のウィーンの文化や芸術の中でのロースの位置づけを研究すると共に、これまで未邦訳である彼の3つの著作に関し、ドイツ語原文の翻訳を行い、出版物として公式なかたちで世に出す、ということを行っています。ここにこそ我が研究室の醍醐味があり、他の建築史研究室と一線を画す点と言えます。また、理工系の学問において、唯一その学問自体の歴史を専門に扱うのは、「建築史」のみであり、つまり建築を語る上で、歴史は不可欠な存在なのです。これらの事を踏まえ、私は建築史研究室へ進学致しました。

次

に、話は戻って、研究室に配属される以前の大学生活に関して少し触れます。早稲田大学建築学科では入学直後から、建築の専門科目を履修することができます。とはいえ、いきなり設計からはじめるわけではなく、まずは手でものを描くことを徹底して教えられます。人や家具、樹木などのスケッチから始まり、名建築の図面のトレースをたっぷりこなし、そして2年後半から設計課題へ移ります。それと並行し、英語や数学などの教養科目、先に述べた各分野に関する専門科目を学び、造形の演習や実験を行う期間もあります。設計課題に関しては、提出後、現役建築家でもある教授陣を前に、一般公開の中、プレゼンテーションを行い、講評を受ける事が出来ます。それぞれの科目を、名立たる教授陣が直々に教えてくださるわけで、他大建築学生からすれば、羨むものかもしれません。

大学の様子・・・

早

稲田大学は、高田馬場の本部キャンパスをはじめとし、所沢、北九州などいくつかのキャンパスを有しております。その中で、私の所属している創造理工学部は、先進理工学部、基幹理工学部とともに、JR 高田馬場駅に程近い、副都心線西早稲田駅に直結する西早稲田キャンパスを本拠地としています。理工学部キャンパスとはいえ、他学科の事情に関してはいまいち判りかねるので、建築学科の諸相に軽く触れます。建築学科専用の設備としては、200 台ほどの製図台が並び製図室、製図ソフトが搭載された PC がこれまた 200 台ほど並び CAD 室、その他にもアトリエやスタジオなどの作業場が用意されています。また、過去の『朝日子だより』にてとある先輩が仰っておられましたが、建築・芸術分野においても、早稲田大学図書館には十分な書籍量があります。授業内容のみならず、設備面に関しても、建築を学ぶ上で、最良な環境であると言っても過言ではないはずです。

大学入学前と入学後の印象の差・・・

高

校時代に、大学に進学された偉大な諸先輩方からのありがたきお話によると、「大学は自由」であり、それは疑いもないことのように考えていましたが、いざ入学してみると、理数科でも容易に上回る物量を限られた時間の中で当然の如く求められました。課題はこなしてもこなしても、次から次へと果てなく押し寄せてきます。逃げられません、逃げたら留年です、留年。もうやんなっちゃう、と思っちゃうこともしばしばありました。これが、標題に対する率直な解になります。とは言え、やはり課題内容はどれも興味深いものですし、設計課題はもちろん、机上の勉強、プレゼンテーションなどにより、広範な知識・能力を得ることができ、次第にそんな生活が当たり前になり、自由へと解き放たれていきます。



アドルフロース（原さん 撮影）

高校生と大学生の違い・・・

白

分自身、高校生活と大学生活とを比較してみると、自分を客観視する、ということが無意識に増えた気がします。よく言われている事ですが、大学は高校と異なり、自由である、確かにこれに間違いはないかと思われます。何を何時間やろうと大学生は自由なのです。そんな大学生活において重要になってくるのは、何をしなければならず、それにどれだけの時間を割くかという自己管理です。まず、今の自分には何が出来て、そんなことより何が足りないのかということ把握し、全体における自分の立ち位置を理解する。そして自分の行動を組み立てるということが必要になります。それを怠ると、ただ漠然と無心に生活することになり、時が来て手遅れということになりかねません。

一方、高校の部活や勉強においては一定の枠が既に設定されているが故、自分の立ち位置を理解することが、大学生にも増して有用であるように感じます。むしろそれが出来れば、かなりの武器になるはずです。うまくいっている人は、意識的にしろ無意識的にしろ常にそういった自問自答を繰り返しているのではないのでしょうか。私は高校時代、バレーボール部に所属していましたが、ただ闇雲に激しい練習をこなしても無駄、今やってる練習の意味を理解し意識する、足りない部分は練習試合や大会のときなどに自分の中でこいつはやるなーと感じる選手を観察し、帰って動きを真似する、という事をしていた気がします。皆さんそれぞれにやり方があるとは思いますが、普段何気なくやっている練習や勉強に対し、これが今まで培ったどのような基礎に基づくのか、そして今後どう応用され得るかという「時間の流れ」を、少し離れて自分を観察するような気持ちで意識してみてください。

さらにその時、覚えておいていただきたいのは、私の大学のある教授が度々口にする言葉、「幼稚な我は捨てろ」。非常にぐさっとくる言葉ですが、確かにその通りで、もちろん私も含め若いうちは無意味な幼稚な我で選り好みする事なく、素直に先人の様々な意見を吸収したいものです。

卒業後の進路・・・

本 来なら、理工学部全体に関して述べられると皆さんにとって有用なのかもしれませんが、いかんせん建築学科は他学科とは相容れない部分が多くありますので、やはり所属する建築学科についてのお話です。早稲田大学建築学科では、4年進学時に建築史・建築計画・都市計画・環境工学・建築生産という6つの系から自身の適正を見定めた上で、試験を経て、各研究室に配属されます。それぞれの研究室により、専門が異なりますので、当然就職などその後の進路にも大きく影響します。ただ、学部卒業後、就職あるいは他大学の大学院へ進学する学生もいますが、例年、8割程の学生がそのまま配属された研究室でさらに2年間の大学院生活を送ることになります。学科全体としての大学院卒業後の就職先は建築に関連する企業または事務所を中心に、ゼネコンや組織設計、個人事務所、ハウスメーカー、出版社など多岐に渡っています。

最後に吉高生に向けて・・・

私 が高校生の頃には、建築学科を目指す同級生もほとんどおらず、建築学科に進学した先輩さえいないという状況でした。そのためかなり限られた情報に頼るほかありませんでした。駄文ではありますが、建築学科を目指す方にとって少しでも役に立ち、また、これを機に一人でも新たに建築学科に興味を持ていただければ幸いです。どうぞ、ご笑覧ください。

